

平成22年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ウルメイワシ

学名 *Etrumeus teres*

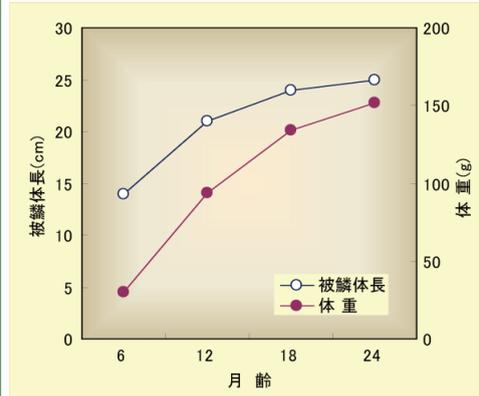
系群名 太平洋系群

担当水研 中央水産研究所



生物学的特性

寿命: 2歳前後
 成熟開始年齢: 9カ月(一部)、12カ月(100%)
 産卵期・産卵場: 10～7月で、盛期は2～7月と11～12月の年が多い、沿岸域
 索餌期・索餌場: 周年、沿岸域
 食性: 動物プランクトン等
 捕食者: 中大型浮魚等

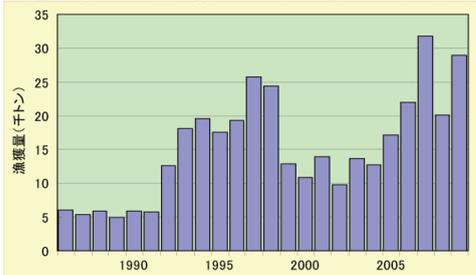


漁業の特徴

主に旋網、定置網により漁獲される。和歌山県では棒受網でも、また、高知県では多釣りでも漁獲する。シラス(稚魚)期は船曳網で漁獲される。外国船による漁獲はない。

漁獲の動向

宮崎～三重県の合計の漁獲量は1991年まで低水準であったが、1992年に急増し、1993～1998年では18千～26千トンと高水準であった。1999～2005年ではおおむね10千トン台に減少したが、2006年は22千トン、2007年は32千トンと増加した。2008年は統計数値としては28千トンであったが、関係機関集計による主要港水揚量から20千トンと推定した。2009年漁獲量は29千トンと、2007年に次ぐ値となった。

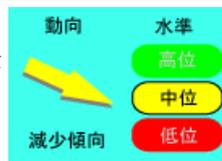
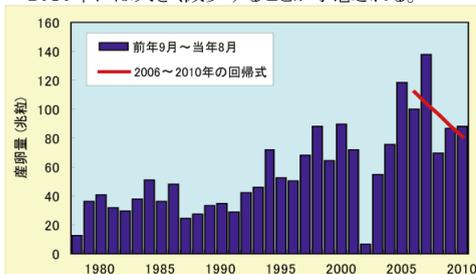


資源評価法

産卵量および漁獲量の推移により資源の水準と動向を判断した。産卵量として、各県水産試験研究機関と水産研究所による改良型ノルバックネットの鉛直曳採集結果に基づき、中央水産研究所がとりまとめた月毎の産卵量データを用いた。ウルメイワシの産卵期は10月頃始まり翌年の7月頃まで続くことから、産卵量として前年9月～当年8月を集計した。2010年漁獲量は、前半と後半の漁獲量の間の正の相関関係を用いて予想した。

資源状態

2004～2007年産卵期まで産卵量の増加傾向が続き、2007年産卵期にはピークの138兆粒となった。2008年産卵期には69兆粒に減少したが、2009年産卵期には87兆粒とやや増加した。2010年産卵期には2009年産卵期と同程度の87兆粒となる見込みである。最近5年間の産卵量は減少傾向を示している。2006年以降の漁獲量は高い水準にあったが、2010年には大きく減少することが予想される。



管理方策

水準・動向が中位・減少にある本資源の管理目標としては、現状の漁獲量を減少させ、資源の維持を図るべきであると考えた。最近5年間の産卵量の推移の回帰式から求めた変化率は、2009年から2010年では0.91、2010年から

2011年では0.90となり、2009年から2011年では両者の積から0.82となった。ABCtargetは、ABClimit×安全率0.8(標準値)とした。

| | 2011年漁獲量 | 管理基準 | F値 | 漁獲割合 |
|-----------|----------|---------------|----|------|
| ABClimit | 24千トン | 0.82C2009 | - | - |
| ABCtarget | 19千トン | 0.8・0.82C2009 | - | - |

資源評価のまとめ

- 資源量の水準・動向は産卵量と漁獲量で判断した
- 2010年産卵期の産卵量は1978年産卵期以降では中位水準にある
- 2006～2010年産卵期の産卵量は減少傾向にある
- 2006年以降の漁獲量は高い水準にあったが、2010年には大きく減少することが予想される

管理方策のまとめ

- 管理目標としては、現状の漁獲量を減少させ、資源の維持を図ることとした
- 2009年漁獲量に係数0.82(2009年から2011年への産卵量の推定減少率)をかけた値を生物学的許容漁獲量の上限とした

執筆者: 阪地英男、梨田一也

資源評価は毎年更新されます。